

昭和二十三年九月一日第三種郵便物認可  
平成十七年十一月一日発行  
通巻九七五号(毎月一回一日発行)

# 京鹿子



11月号



秋高し  
丸山佳子

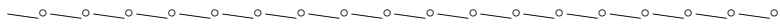
二百十日鳥居をくぐりトンネル抜け

こんな日は鯉になりたい布袋草

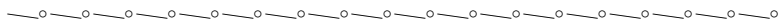
看板の笑みを貰ひて秋高し

明日のない切株百に小鳥来る





大社の蟬に耳がぴりぴり最敬礼  
うら声で人ふり向かす法師蟬  
雀にも三分の利あり稲黄ばみ  
ピカソ調十七体の案山子まつり  
蓮は実に肝に銘じる事あまた  
吊橋で秋惜しませてくれるダム



豊田都峰 十一月号

清響集 その五十五



炎天を行くやひとすぢではなくも  
明け詣でつゆをはらふをこととして  
道しるべどこを指しても露ばかり  
死ぬる日もここよりとせむ露しるべ  
消してより秋のあかりと思ひけり  
秋灯と言ひきつてより詩の成けり

水澄みて雲のうらがは見てみたり  
余呉めぐるコスモスあれば立ち止まり  
古戦場葛のうら葉の吹きなだれ  
観音をめぐればすすきのたつき径  
どこまでも花野伊吹を盛りあげて  
銀漢や北へ旅立つこととせむ  
露わきてたちまち貌を失へり

「俳句」十八年度十二月間一句づつ出稿  
「俳句界」十二月・一月」巻頭三句など出稿

# 秀華採集

砂時計かへしてみても敗戦日

大村 美和子

時は帰らない。取り返しは出来ない。たとえ十秒程度のものでも。「砂時計」を持ち出したのには感心した。目で確かめる事も出来るので。俳句は「もの」であることを再確認している。

石仏の影も石仏吾亦紅

木山 杏理

道行に少し遅れる椿かな

河西 志帆

前句。仏には影がない。影があれば非仏。しかし、人間の作った石仏には影が、しかも石仏の影が。外のなものでもない影が。するとやはり影がないことになる。そんな自己問答を吾亦紅が聞いている。後句、咲くにしろ落ちるにしろ決定的瞬間がずれる。心象の椿である。

鈴鹿 仁

萩まつり二句

神在す一すぢの道萩の蝶  
合言葉甦へるなら萩ん中  
身に入むや白黒写真にある嘶  
新米の白さ一粒ごとの貌  
山蟻河野義海様追悼のすべ失へり羅漢山  
一葉落つこ磯部静歩様追悼こは想ひの杉の里  
火の國の曠野へ残す露しぐれ笠間圭子様追悼

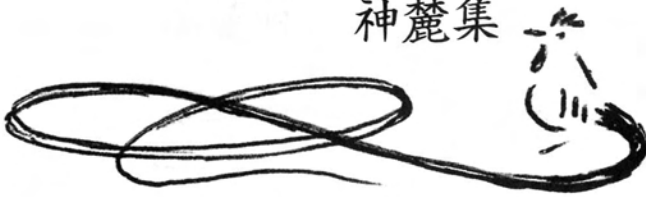
近 詠

宇都宮滴水

一つ枕

手のひらの紙の重さや秋灯る  
稲妻や村の掟に縛られず  
往年の涙を捨てに葛の原  
虫しぐれ一つ枕をうら返す  
十三夜ことば紡ぎて又ほぐす  
存問や源流の秋とまどひし  
曇天の一角くづる毒きのこ

# 神麓集



仲麻呂や真備とともに夏の星  
井真成異国にもがり魂おくり  
留学生国葬されて夕映えし  
星まつり玄宗悼み五位諡る  
墓誌の銘最古日本の盆まつり

林 日圓

七月や御世三代を生き抜きし  
七月や健に米壽を迎へけり  
満米壽の誕生の朝の髭を剃る  
核廃絶に市長の決意原爆忌  
美味き水飲めるしあはせ原爆忌

北村 香朗

老鶯の啼き声身近か山祠  
花榭翅のぶんぶん日矢を盛り  
おはぐろの宮の玉砂利雨じめり  
昨夕の雨今朝は門田の風青波  
神々の走り雨して花十薬

山 丸山 冬鳳

男とて不骨な煮炊き魂祭  
生者死者かたみに通ふ盆の道  
二夜さの雨に洗はれ銀河濃し  
街に夜を残り遠のく稲びかり  
竹伐つて裏山に雪湧きたたす

稲びかり 藤岡 紫水

医王山はるかに虹の欠けそめし  
さんさんと夜の五箇山月の冴え  
雪解の没日に峠七曲り  
俱梨迦羅は闇にとざされ雪解す  
吹雪して又も狐の遠吠える

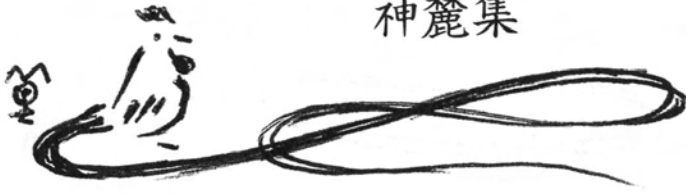
山田 耕子

風鈴が答へてくれる独り言  
酔芙蓉禁酒すれども色替ふる  
炎暑ゆく吾が影一尺花雁皮  
ひと雨にひしめきあひし貝割菜  
朝顔の支へ棒出て風を知る

吉田 多美



# 神麓集



長嶋が顔見すドーム半夏生  
 角直指  
 格技いま雌雄を決す半夏生  
 蟬しぐれ無用の用の鎖樋  
 蟬死せり物質文化世に驕り  
 揚羽来て五足の靴の碑を遺す

火の国の甘監玉の霸気強し  
 襦袢瓶史  
 芸猿の厚き返礼蟬しぐれ  
 風鈴に火の声混じる阿蘇夕べ  
 朝顔の阿蘇借景の二段柵  
 兜虫山よりでつかい園児の手

音光雨をセツトに雷暴る  
 丹生をだまき  
 逆光にヨットの三角水平線  
 夕焼けて島の柵田は金波なす  
 ジーンズの似合ふ七十巴里祭  
 海彦が山彦が呼ぶ夏休み

美作の青田 山田をがたま  
 ローカル線も定刻発車青田行く  
 青田中朱のワンマンカーは一輛のみ  
 青田中無人駅あり山迫る  
 沿線は緑一色露はるる  
 美作の山河うるはし夏に入る

川崎 光一郎  
 世の中をなほ杳くしてサングラス  
 水中花水に命を貫ひけり  
 たくましや屁尿葛といふ醜名  
 白地着て白寿の刀自の気骨かな  
 山の端にかかる絹雲秋に入る

青二才 伊藤希眸  
 霧霽れて青水無月の山を据き  
 あを青と秋の噴水律しゐる  
 涼新た青僧ひとり庭を掃く  
 新涼の青きたそがれ島小松  
 虫の夜やペンを転がす青二才



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

京都 大村美知子

自分史に未来まだあり麦藁帽  
秋たてり鷺の抜き足水こぼす  
砂時計かへしてみても敗戦日  
扁額や読めて涼しきはつか鮎  
身の上を語り余して夜の蟬  
舟虫を走りまはらす海女の葬  
日常を遠巻きにしてひつじ草  
石仏の影も石仏吾亦紅  
今生を何のかんのと鰻井  
目薬に逆袋のひとしづく  
屋顔の本気はすぐに解けて効く

土田 河西 志帆

子離れや抽斗に飼ふ草の絮

井守家守きみを守ると言はれても

道行に少し遅れる椿かな

確かな秋に襟首つかまれてぬます

半睡のビルのぼりゆく蟬の声

墓つづまるところ雲上人

のうぜんや一匙の毒身より抜け

垂直に降り黒蝶の現つかかな

花ねむの母よと翔てり波羅蜜多

あの父の八月十五日の最敬礼

隣室のおそろしき闇八月

千葉 伊藤 希眸

直江 裕子